小林貞作先生のご逝去を悼む

田中　晋

Memory of Late Prof. Teisaku Kobayashi

Susumu Tanaka

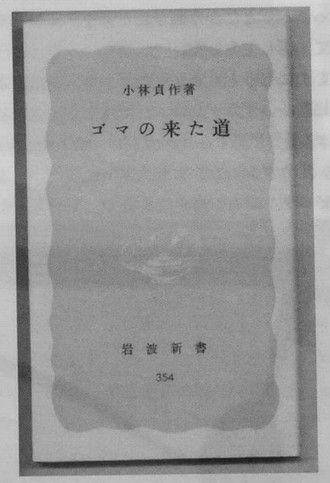
平成13年の師走に入って間もないとき、本学会の名誉会員である小林貞作先生が突然逝去された。富山県自然保協会の理事会と懇親会に出席された後、富山へ来た時の定宿としていた富山大学職員会館へ戻り、会館の浴室で倒れ、翌朝発見されたという不慮の死であった。

富山大学を退官された後、住まいを横須賀に移されたが、毎年富山へも足を運ばれた。ここ数年にも富山の思わぬ場所でお会いすることもあった。最近在職中と比較すれば、体形も少しほっそりとされ、お顔の皺が増えたなあとの感想をいだいていたが、まだまだお元気に長生きされるのではないかと思っていたところである。

小林貞作先生は初期からの富山県生物学会会員として、また昭和45年から63年までの17年間は学会の会長として、富山県生物学会の発展に寄与された。平成４年にはその功績によって、富山県生物学会賞が授与されている。小さな学会故会費免除など名誉会員の特典もなく、毎年快く会費を送ってくださったことには感謝の気持ちでいっぱいである。

会長であった期間には、生物学会誌に毎号巻頭言を執筆されている。読み直してみると、先生はその時々のトピックスに触れているが、一貫して生物学の基礎的な研究を重視されていることが読みとれる。また、時代を反映されて公害から環境問題、自然保護へと論点が推移し、一方ではバイオ研究の発展を予察され、会員には生物学会の長い歴史に誇りをもって研究に励むよう叱咤されている。ただ残念なことは、巻頭言と学会賞受賞のことばを除き学会誌への寄稿がなかったことである。

小林先生は、ゴマの研究では日本をリードする研究者であり、富山大学の看板を背負っていた有名教授でもあった。私は、富山大学では学部を異にしていたため接する機会もさほど多くはなかったが、何かのお願いにあがった時はいつもにこやかに対応していただいた記憶がある。富山で亡くなられたのも深い因縁を感じることで、ここに謹んでご冥福をお祈りする次第である。



小林貞作先生の著書「ゴマの来た道」

小林先生を偲ぶ

増田恭次郎

Memory of late Dr. Teisaku Kobayashi

Kyojiro Masuda

私が富山大学に赴任したのは昭和43年(1986年)11月でした。都立大学の大学院修士課程2年次の博士課程の試験も済んだ頃、遺伝学教室の某教授が富山大学で植物形態学のできる人を捜しているよ、と私の所属する研究室に教えてくれました。私の直接の指導教官だった故塙順助手が、私は4月から弘前大学へ赴任してしまうので、植物形態学の指導者がいなくなるから君もいっそ就職してはどうですかと云われ、富山大学へ行くことにしました。小林先生は晩秋の銀杏が熟して落ちだした頃にわざわざ都立大学まで足を運ばれ、私に会って下さいました。私の講座の故小野記彦教授が小林貞作先生の名古屋大学時代の上司であったこと、私の指導教官の故塙先生が同じ名古屋大学の出身であることを後で聞かされました。当時の富山大学の文理学部の理学科が他大学の理学部並みに拡充されることによる求人でした。先生の話では4月からと云うことでしたが、4月になっても一向に来て下さいと連絡がありませんので、仕方なく博士課程に進んでいました。そして10月になって、11月から来て欲しいとお呼びがかかった次第です。赴任して間もなく学生による本部封鎖が始まり、富山大学の大学紛争が始まりました。

小林先生が何時から当会の会長をされていたのか記憶にありませんが、何時の頃からか先生の研究室に本多啓七先生はじめ当時の役員の方々が時折集まっておられたことを思い出します。また、私が何時から会員になったのかも覚えていませんが、大学院時代の研究の一端を、当時植物組織培養が珍しい時だった事もあって、キクニガナの組織培養について、当時富山工業高校にあった理科センターで当会の総会の後に先生の薦めで話したことを懐かしく思い出します。先生が停年退官されて15年になります。それまでの間どれほどの長きに渡って会長をされていたことか。時にワンマンとも思える強い指導力で当会の発展に尽くされたことは誰もが認めるところです。

先生は、富国強兵食糧増産の学生時代に卒業研究でゴマをテーマにもらい、以来ゴマの研究に専念されて、ゴマの花軸基部にある２つの花外蜜腺を放射線処理によって突然変異を起こさせて花に変え、花外蜜腺が花と相同器官であることを証明されました。このこともあって放射線の平和利用にも積極的に関わってこられました。そして押しも押されもせぬ世界のゴマ博士になられました。また御研究の集大成とも云える「ゴマの来た道」を1986年に出版され、また「ゴマの科学」研究会を同年に作られ、5年後には「日本ゴマ科学会」に発展させました。さらに「ゴマ食文化研究会」を作られてゴマの利用にも大いにご尽力なされました。

先生にはまだまだお元気でご活躍いただけると思っていましたのに大変残念に思います。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1985年12月、
研究室の忘年会にて